

RETAILER ACADEMY NEWS

Dec 2017 | Bentley Motors Japan



TRAINING

新型コンチネンタルGTの
スタティックトレーニングを実施

ベントレー モーターズ ジャパンは11月30日と12月1日の2日間、フォルクスワーゲン グループ ジャパン株式会社のトレーニングセンターで新型コンチネンタルGTの商品研修を行い、全国から25人のベントレースタッフに参加いただきました。

今回の研修は試乗を行わないスタティックトレーニングで、まず実車を見てこの車の良さをできるだけ多く発見し、お客様とのスムーズな商談を実現することを目的としました。各参加者は、非常に真剣に実車を確認していただき、さまざまなユニーク セールス ポイント (USP) を発見していただきました。ここではその一部をご紹介します。

トレーニング参加者が発見した
コンチネンタルGTのUSP

EXTERIOR [エクステリア]

- スーパーフォーミング
ボディのプレスラインがきれいに出来て、ベントレーの力強さを強調している。—— ベントレー東京・吉田様
- 新型ヘッドライト
クリスタルガラスのような高級感を演出している。—— ベントレー名古屋・宮田様
- マトリックスグリル
より大きく横長になったので、ワイド感と車両の低さを演出している。—— ベントレー東京・大山様

- ドア
どこでも止まる（位置）で、狭い場所でも乗り降りしやすくなった。—— ベントレー大阪・田中様
- 22インチホイール
より低重心に見える。また、キャリパーが大きく走行性能の高さを感じる。—— ベントレー神戸・伊藤様

INTERIOR [インテリア]

- ダイヤモンド イン ダイヤモンド
一目でこたわっているのが分かる。高級ソファのような完成度。シート単体でも工芸品として通用しそうな美しさと繊細さ。—— ベントレー東京・宮田様
- ローテーションディスプレイ
スクリーンを回転して格納することで「隠す美しさ（見せない）」を表現している。—— ベントレー名古屋・木戸様
- ウッドパネル (Koa & デュアルヴェニア)
これまでにないウッドで質感と高級感がアップした。—— ベントレー東京・山田様
- ムードライティング
7色に変化して視覚的に非常にきれい。—— ベントレー福岡・松井様
- レバーやスイッチの加工
ダイヤモンドナールリングは、つい触りたくなるほど美しい。—— ベントレー神戸・堀川様

PERFORMANCE [パフォーマンス]

- 8速デュアルクラッチトランスミッション
スポーティな走りと経済的な走りを両立。—— ベントレー名古屋・棚橋様
- 10ポットブレーキキャリパー&420mmブレーキディスク
もはやカーボンブレーキディスク不要。—— ベントレー福岡・清原様
- 最高速度333km/h
ラグジュアリーかつスポーティでこれだけ速いのはベントレーだけ。—— ベントレー大阪・来生様

SAFETY [安全装備]

- 先進のアシストシステム
現行モデルにはなかった数々の装備が選択可能。—— ベントレー東京・生形様
- シティスペックとツーリングスペック
街乗りに必要な安全装備が詰まっているうえ、より楽にロングドライブを楽しんでいただける。—— ベントレー大阪・丸野様
- LEDマトリックスヘッドランプ
30km/h以上で作動し、ハイビームを分割することで他車の眩惑を防止する。—— ベントレー東京・岡田様

満を持して登場したスーパー SUV Lamborghini Urus

2017年12月4日、ランボルギーニは同社初のSUVモデルとなる、ウルスを発表しました。自ら「世界初のスーパー SUV」を標榜するウルスは、同社にとってアヴェンタドール、ウラカンに次ぐ第3のモデルであり、ラグジュアリー SUV 市場に新たな流れを生み出すモデルとなります。

コンセプトモデルを踏襲したスタイリング

ウルスがコンセプトモデルとして最初に公開されたのは、2012年の北京モーターショー。車両全体の2/3がボディで残り1/3がウィンドウという、スーパースポーツカーのデザイン要素をそのままSUVにしたような特徴的なスタイリングは、5年の歳月を経てデビューした市販モデルにも踏襲されています。さらに最新のランボルギーニデザインにアップデートされたことでアグレッシブさを増し、SUVモデルにふさわしい力強さが強調されました。



ランボルギーニが多用する六角形のモチーフがエアインエークに用いられたほか、Y字形LEDヘッドライトを採用。一目でランボルギーニとわかる特徴的なデザインモチーフを採用している



サイドでは、リアに向かって立ち上がるダイナミックなキャラクターラインが特徴的。六角形のホイールアーチは、1980年代に製造していたオフロードモデルのLM002やカウンタックから受け継いだディテール。ホイールは21インチから23インチまで設定されている

ランボルギーニ初のターボエンジン

パワーユニットは、アルミニウム製の4.0リッターV8ツインターボ・ガソリンエンジンが設定されます。ランボルギーニではこれまでV12およびV10の自然吸気エンジンを搭載していましたが、SUVのウルスではオフロードなどで低速のトルク性能が要求されるため、低回転域から高いトルクを発生させるV8ターボエンジンが選ばれました。最高出力は650ps、最大トルクは850Nmを発揮します。

このエンジンの基本設計はポルシェによるもので、Vバンクの内側にターボチャージャーを配置するセンターターボ・レイアウトにより、エンジンの小型化とレスポンスの向上を実現しているのが特徴です。このエンジンはすでにパナメーラ ターボやカイエン ターボに搭載されていますが、ウルスでは最高出力で100ps、最大トルクでは80Nmも上回ります。乾燥重量2,200 kg以下という軽量設計と併せて、パワーウェイトレシオは3.38 kg/psを実現。現時点でもっとも優れたパワーウェイトレシオを備えたSUVとなります。8速ATとの組み合わせにより、0-100km/h加速は3.6秒、最高速度は305 km/hと発表されています。



路面状況を問わないドライビングダイナミクス

4輪駆動システムはトルセン式のセルフロッキング・ディファレンシャルで、標準の前後トルク配分は40:60。状況に応じてフロントには最大70%、リアには最大87%まで駆動力が配分されます。リア・ディファレンシャルにはアクティブ・トルク・ベクタリングが備わり、リア・アクスルにはアヴェンタドール Sで導入されたリアホイールステアリングを採用しています。

路面や運転状況に応じて車高の上下調整を行うアダプティブ・エアサスペンション・システムには、同社初となる電気機械式アクティブ・ロール・スタビライゼーション・システムを装備しています。

また、センターコンソールに装備されたドライブモード・セレクトーでは、さまざまな走行条件に適したセッティングを選択できます。標準ではSTRADA、SPORT、CORSA、NEVE（雪上）の各モードが用意され、オプションでTERRA（オフロード）とSABBIA（砂漠）の2つのオフロードモードを設定することも可能です。

スポーティでラグジュアリーなインテリア

ダッシュボードの送風口をはじめとする各部には、同社のデザインテーマでもある六角形が用いられています。また、センターコンソールのイグニッションボタンやドライブモード・セレクトーなどは、アヴェンタドールやウラカンに通じるメカニカルなデザイン処理が行われ、インテリアにおいてもランボルギーニらしさを強く主張しています。



エアコンやシート調整などの機能が組み込まれたインフォテインメント・システムには、2画面方式のタッチディスプレイが採用されました。ダッシュボード中央に備わる上部のディスプレイは、エンターテインメント用のインターフェース。各種メディア、ナビゲーション、電話、車両情報などの機能を操作できます。一方、センターコンソールに装備される下部のディスプレイは、キーパッドや手書きでの文字入力に対応。さらにエアコンの調整やシートヒーターなどの機能を操作できます。



リアシートは3人乗車が可能なベンチシートが標準で、シートを倒せばラゲッジスペースを616リッターから1,596リッターに拡大することができる。オプションで2人掛けのリアシートも選択可能

正式発表前から予約受注を開始していたウルスの価格は、25,740,000円（税抜）。納車開始は2018年春以降と発表され、日本にも同年中に正式導入されると思われます。さらにPHEVモデルの追加も予想されるなど、今後の動向に注目すべきモデルといえるでしょう。

COMPETITORS INFORMATION



ニューモデル BMW 6シリーズ グランツーリスモ	
発表・発売日	2017年10月23日 発売
概要	・クーペ・スタイルと高い機能性を兼ね備えた新コンセプトのモデル ・ラグジュアリーセダンに匹敵する全長5,105mm、全幅1,900mm、全高1,540mmのボディサイズ ・4輪アダプティブ・エア・サスペンションによる快適な乗り心地
車両価格 (税込)	BMW 640i xDrive Gran Turismo M Sport：10,810,000円
デリバリー 開始時期	—



一部改良 ジャガー XJ 2018年モデル	
発表・発売日	2017年10月13日 受注開始
概要	・0-100km/h 4.4秒、最高速度300km/hを誇る「XJR575」を追加 ・最新世代のインフォテインメント・システム「Touch Pro」を標準装備 ・クルマとスマートフォンをつなぐ「InControl」の通信機能を備えたプロテクトを標準装備
車両価格 (税込)	XJ LUXURY：11,490,000円 XJ PREMIUM LUXURY：12,530,000円 XJ PORTFOLIO：14,030,000円 XJ R-SPORT：14,340,000円 XJR575：18,870,000円 XJ AUTOBIOGRAPHY LONG WHEELBASE：20,690,000円
デリバリー 開始時期	—



ニューモデル BMW M5	
発表・発売日	2017年10月24日 受注開始
概要	・Mモデルのセダンモデルでは初となる4輪駆動システムのM xDriveを採用 ・新型ターボチャージャー採用の4.4L V8エンジンで、最高出力600 ps ・全世界400台、日本向け5台の限定車も同時発売
車両価格 (税込)	BMW M5：17,030,000円 BMW M5 First Edition：18,640,000円
デリバリー 開始時期	2018年4月以降



マイナーチェンジ マセラティ グラントゥーリスモ/グランカブリオ	
発表・発売日	2017年10月12日 発売
概要	・空力効率の向上と、最新の歩行者安全関連規制への適合をメインとしたフェイスリフトを実施 ・グラントゥーリスモ / グランカブリオのそれぞれに、スポーツとMCの2種類をラインアップ ・460 psの4.7L V8自然吸気エンジンを搭載
車両価格 (税込)	グラントゥーリスモ スポーツ：18,900,000円 グラントゥーリスモ MC：22,160,000円 グランカブリオ スポーツ：20,000,000円 グランカブリオ MC：21,750,000円
デリバリー 開始時期	—



ニューモデル ランボルギーニ アヴェンタドール S ロードスター	
発表・発売日	2017年10月20日 発表
概要	・6.5L V12エンジンは740ps、690Nmを発揮。0-100km/h加速3.0秒、最高速度350km/h ・後輪を同位相・逆位相に操舵するリアホイールステアリングを採用 ・5台限定の日本向け特別仕様車「アヴェンタドール S ロードスター 50thアニバーサリージャパン」も発表
車両価格 (税込)	アヴェンタドール S ロードスター：49,969,107円
デリバリー 開始時期	—



一部改良 メルセデス・ベンツ GLE/GLE Coupé	
発表・発売日	2017年10月25日 発売
概要	・特別限定車「GLE 350 d 4MATIC Coupé Sports OrangeArt Edition」を100台限定で発売 ・GLE 43 4MATIC/GLE 43 4MATIC Coupéのエンジン出力を従来比23 psアップの390 psに向上 ・GLE 43 4MATIC Coupéに右ハンドルモデルを追加
車両価格 (税込)	GLE 350 d 4MATIC Coupé Sports OrangeArt Edition：10,350,000円 メルセデス AMG GLE 43 4MATIC：11,660,000円 メルセデス AMG GLE 43 4MATIC Coupé：12,160,000円
デリバリー 開始時期	—

AWARDS

ベントレーが2017年に受けた数々の栄誉

ベントレー モーターズは、2017年に実に20もの栄誉ある賞を受賞しました。内訳は車両の受賞が16件、企業として受賞したものが4件でした。英国国内だけでなく、ヨーロッパ、米国、中国など全世界の有名メディアの賞も含まれています。

まず、9月のフランクフルトモーターショーでワールドプレミアとなった新型コンチネンタルGTは、すでに4つの賞を受賞。英国BBCの『Top Gear Magazine』では「GTオブ ザ イヤー」に選出され、「純粋に地球上で最も完成されたGTカー」と評されました。『Interior Design Magazine』の「自動車デザイン部門」では、「ベスト オブ ザ イヤー」に選ばれました。その他、ドイツの『Robb Report Germany』からは「ベスト グランツーリスモ スポーツカー」に、中国の『Target』には「ベスト ラグジュアリー オート」にそれぞれ選ばれています。

発売から2年になろうとしているペンティガですが、このクルマに対する賛辞も途切れることはありませんでした。忘れられるどころか抜群の存在感を放ち、ペンティガだけで7つの賞を受賞。実際のところ、2017年にベントレーで最も多くの賞を受けたモデルでした。

フラッグシップモデルのミュルザンヌも健在。『GQ』の審査員はミュルザンヌEWB（日本未導入）について「伸長したミュルザンヌの広大な後席は、運転せずにクルマで旅行をする唯一の手段。フラッグシップの名にふさわしい規模を持つ希少な1台だ」と評し、「Best Autonomous Cars（最優秀自律運転自動車）」に選出しました。

そして今年もまた、ベントレー モーターズは「ベスト エmployヤー」として選ばれました。雇用者である経営陣だけでなく、クルー工場で働く全てのスタッフの情熱と誇りが評価されました。



受賞モデル	媒体名	賞	国・地域
新型コンチネンタルGT	BBC Top Gear Magazine	GT オブ ザ イヤー	英国
	Target	ベスト ラグジュアリー オート	中国
	Robb Report	ベスト グランツーリスモ スポーツカー	ドイツ
	Interior Design	ベスト オブ ザ イヤー（自動車デザイン部門）	米国
	Robb Report Lifestyle	ベスト オブ ザ ベスト2017	中国
ペンティガ	Autocar	5スター カー	英国
	Robb Report	ベスト オブ ザ ベスト 2017 - コレクターズSUV	ロシア
	Robb Report	SUV オブ ザ イヤー	米国
	Wards Auto	10 ベスト インテリア	米国
	EVO	ラグジュアリー SUVオブ ザ イヤー 2016	中東
	Wheels	ベスト ラグジュアリー SUV	中東
ミュルザンヌ	MECOTY	ベスト ラージ プレミアムSUV	中東
	Octane	ラグジュアリー カー オブ ザ イヤー	英国
	GQ	Best Autonomous Cars（最優秀自律運転自動車）	英国
	Tencent Auto	2017 TTA インボーテッド プレミアム ラグジュアリーカー	中国
	Car & Driver Magazine	10 ベスト カース	中国



新型コンチネンタルGTの導入を日本で正式に発表

ベントレー モーターズ ジャパンは12月19日、都内で新型コンチネンタルGTの記者発表会を行い、このモデルの日本での発売を正式に発表しました。この日は14時と18時の2回に分けて発表会を実施。合わせて42媒体・80人のプレス関係者にお越しいただきました。

発表会の冒頭で挨拶に立ったベントレー モーターズ ジャパンのティム・マッキンレイ代表は、「コンチネンタルGTは、初代から日本で2000台以上が販売された人気のモデルです。新型コンチネンタルGTは、新しいマーケットを創出することができる車です。この車を見

れば、およそ100年前に『良い車、速い車、クラスでベストの車を作る』という哲学でベントレー モーターズを創業したW.O.ベントレーも誇りに思ってくれるはずだ」と語りました。

その後に行った新型コンチネンタルGTのプレゼンテーションでは、エクステリアやインテリア、パワートレイン、テクノロジーなどについて詳細を解説。集まったプレス関係者らが熱心にメモを取る姿が目立ちました。

実車は、9月のフランクフルトモーターショーで使用されたカウントダウン動画も交えてアンヴェールしました。ウォークアラウンドセッショ

ンでは、内外装の細部の写真を撮影したりローテーションディスプレイを回転させてみたり、プレゼンテーションで気になった点を確認していました。

この日に集まっていたいたプレス関係者の注目度は非常に高く、正式発表されたことでお客様からの問い合わせが増える可能性もあります。コンチネンタルGTはベントレーの主力商品です。リテーラーの皆様にも、より一層のご協力をいただき、新型コンチネンタルGTの導入を成功させたいと考えています。



Rタイプ コンチネンタルをサプライズ展示

会場の隣にある中庭のスペースには、1955年式Rタイプコンチネンタルもサプライズ展示しました。ベントレーのグランドツアラーの原点となったモデルと最新のグランドツアラーを見比べてもらい、新型コンチネンタルGTが受け継いだ伝統を実感していただきました。



燃費・排ガスの新基準「WLTP」とは？

現在、燃費や二酸化炭素および大気汚染物質の排出レベルの測定は、世界各国で独自の基準に基づいて実施されています。国連欧州経済委員会の主導で、これを世界共通の基準にしようという活動から生まれたのが、WLTP (Worldwide harmonized Light vehicles Test Procedure) です。日本では2018年10月から、これまで使用されてきたJC08モードに代わってWLTPに全面的に移行することになります。WLTPでは、実際にユーザーが車を使用する状況に近い条件で試験が行われます。

ベントレー モーターズでe-Motionセールス&マーケティングのプロジェクトマネージャーを務めるマルコ・ノルドハウゼン氏は、「これまでよりもアクセルオンとブレーキングのサイクルが多いなど、より現実に近い条件となるため、WLTPはダイナミックで正確な方法と言えるでしょう」と話しています。新しい基準が導入されると、燃費やCO2排出量などの数値が変わる可能性があります。ノルドハウゼン氏は「数

値が変わることで、お客様が支払う税額が変化する市場もあるかもしれませんが。リテーラーの皆様には、その点をご注意いただきたい」と注意喚起しています。

この変化は決して小さくないため、ノルドハウゼン氏も「WLTPの導入に備え、あらゆる分野で準備を進めていきます」と強調しています。



CONFIGURATOR

デザイン部門のトップが描く「夢のコンチネンタルGT」

ベントレーのコンフィギュレーターには、コミショニングコードを入力すると過去に作った仕様を呼び出せる機能があります。

現在、ベントレー モーターズのデザイン部門のトップ3人による新型コンチネンタルGTが、下記のコミショニングコードで呼び出すことができます。いずれも3人のこだわりが垣間見えるベントレーらしい仕様になっています。内外装のカラーリングなどでお悩みのお客様に対する提案の一助にもなります。ぜひ、デザインのプロである3人が思い描く「夢のコンチネンタルGT」をご覧ください。

デザインディレクター
Stefan Sielaff

コミショニングコード： **EB2AGQNC**



インテリアデザイン&カラー&トリム部門リーダー
Romulus Rost

コミショニングコード： **E2HAAEZG**



エクステリアデザイン部門リーダー
John Paul Gregory

コミショニングコード： **EJ6PC66Q**



SNS

ベントレー モーターズ ジャパンの公式Facebookのフォロワー数が1万人を突破

ベントレー モーターズ ジャパンが10月に開設した公式Facebookですが、皆様のご協力もあり、12月中旬にフォロワーが1万人を超えました。フォロワー数をさらに増やし、より多くの「いいね」やコメントをいただけるよう、今後もベントレーの歴史やプロダクト、過去の名車にまつわるエピソードをはじめとするコンテンツを充実させてまいります。リテーラーの皆様にも、さらに多くのお客様にご紹介くださいますようお願いいたします。



台形トルクカーブの特徴

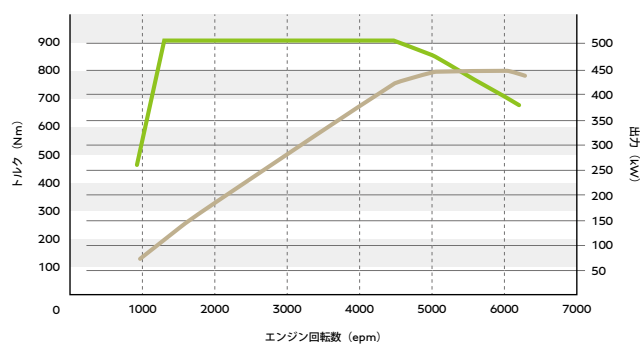
ベントレーの特徴の1つに「台形トルクカーブ」があります。

搭載されるエンジンのトルク特性を示したグラフが、まるで台形のようになっていることからこう呼ばれています。

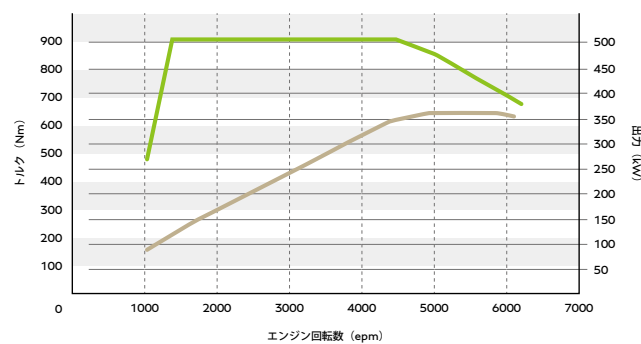
台形トルクカーブには、いったいどんな特徴があるのでしょうか？ライバルの状況やメリットとデメリットなどを紹介します。



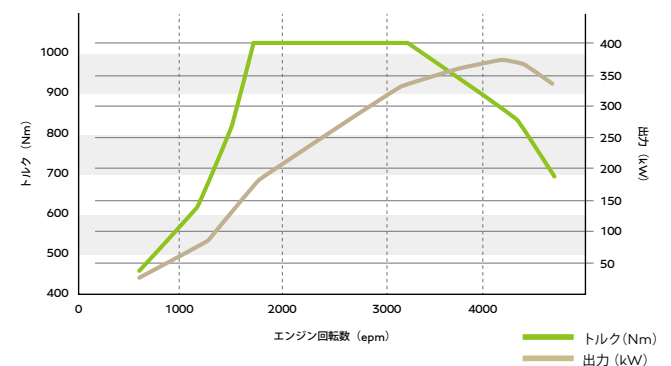
BENTAYGA



NEW CONTINENTAL GT



MULSANNE

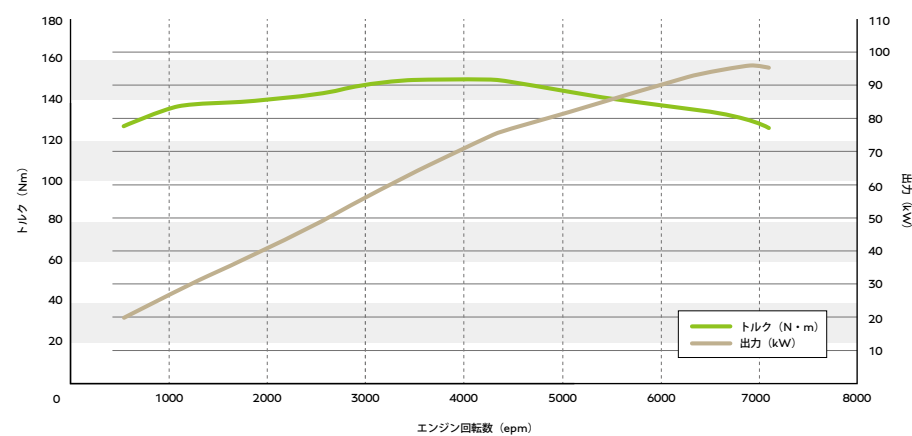


台形トルクカーブとは？

エンジンの回転数に対して、どれだけパワーやトルクが出ているのかをグラフ化したものがエンジン性能曲線です。パワーやトルクが、どの回転数で発生されるのかが一目でわかるため、そこから、そのエンジンの性格を知る手がかりとなります。注目してほしいのがトルクの発生を示す曲線です。これは一般的には「トルクカーブ」と呼ばれています。上記にあるベントレーの現行モデルのエンジン性能曲線を見てください。2つある曲線のうち、上がフラットになり、まるで台形のようにになっているのが、各モデルのトルクカーブです。ここには掲載していませんが、フライングスパーや従来型コンチネンタルGTも同じような台形トルクカーブです。

ちなみに、下に他ブランドの小排気量モデルのエンジン性能曲線を掲載しました。こちらはトルクカーブがなだらかな山のような形で、ベントレーのような台形トルクカーブとは明らかに異なります。このようにベントレーは、台形のトルクカーブを持っていることが特徴となっているのです。

■ 小排気量エンジンを搭載した国産ブランド車のエンジン性能曲線



台形トルクカーブのメリットとデメリット

メリット

- 低速域からレスポンスよく加速できる
- 巡行時のエンジン回転数を抑えることができる
- どの回転数からでも、同じフィーリングで加速できる
- 回転数を抑えることで燃費性能も高められる

デメリット

- エンジンパワーをさらに高めようとするときは駆動系の強化が必要
- 高回転域で頭打ち感がある

台形トルクカーブの走りの特徴は？

では、なぜベントレーは、台形のようなトルクカーブなのでしょう。理由はいくつかあります。ひとつはトルク変動が少ない方が、スムーズに走ることができるというもの。エンジン回転数によって、突然に大きなトルクが発生したり小さくなったりすると、アクセル操作が一定でも、加速力に変化ができてしまいます。しかし、台形トルクカーブのようにピークトルクがフラットに発生していれば、一定でスムーズな加速が可能となります。また、低い回転数から最大のトルクが発生していることは、“ドライバビリティに優れる”と同意となります。常に最大トルクが使えるということは、いつでも最大の力で加速できることを意味するからです。

さらに低い回転で最大トルクが使えるため、高速走行時のギヤ比を低くすることが可能です。ギヤ比が低くなれば、同じ速度で走っていても、エンジン回転数を低くできます。そうなれば静粛性は高まり、燃費性能も高めることとなります。

また、ベントレーがどれも非常にパワフルだからというのも、台形トルクカーブの理由のひとつです。実のところトランスミッションなどの駆動系は、サイズによって許容できるパワーに限界があります。大きな出力・トルクに対しては、より大きく重いトランスミッションを備えなければなりません。大きく重くなるのは運動性能的にマイナスになるため、そのバランスをとる必要があります。そこで、ピークトルクをフラットにすることで、ドライバビリティを向上させつつ、トランスミッションの小型軽量化を実現します。

トランスミッションにはトルクコンバーター式のATとDCT（デュアルクラッチ）が存在しますが、同じサイズであれば、より大きなトルクに対応できるのがマニュアルトランスミッションの進化版となるDCT式です。逆に言えば、非常に大きなトルクを誇るミュルザンヌに採用されたトルコン式ATは、“特別なまでに丈夫である”と言えます。



ベントレーに搭載される6リッターW12ツインターボエンジンは、わずか1,350 rpmから最大トルク900Nmを発生させる。

ライバル車のトルク特性

ベントレーと同じように台形トルクカーブとなっているのがアストンマーティンDB11やボルシェ 911ターボです。DB11の5.2リッターV12ツインターボエンジンは最高出力が608PS。トルクは1,500～5,000回転にかけて700Nmを発揮します。911ターボの3.8リッター水平対向6気筒ターボは最高出力540PS。1,950～5,000回転で660Nmの最大トルクを発生させています。一方でマクラーレン570Sやフェラーリ488GTBは、もう少しピーキーです。マクラーレン570Sの3.8リッターV8ターボは、最高出力570PSで、最大トルク600Nmを5,000～6,500回転で発生させます。またフェラーリ488GTBの3.9リッターV8ターボは最高出力670CVで、最大トルク760Nmが3,000rpmで生まれます。